

## 「のだ」の中核的機能と派生的機能

石黒 圭

### 要旨

多様な用法を生み出すことで知られる文末表現「のだ」は「話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示す」という中核的機能を担うものである。また、この中核的機能に由来する以下の四つの派生的機能のいずれか、または複数の機能が働くことによって、「のだ」の多様な用法が生じている。

充填機能：話し手または聞き手の既存の認識にあるすき間を埋めることを示す機能。

訂正機能：話し手または聞き手の既存の認識にある思い込みを修正することを示す機能。

共有機能：話し手または聞き手の一方にある認識を双方に共有させることを示す機能。

前提機能：「のだ」をともなう文が後続文の展開の起点になることを示す機能。

キーワード のだ モダリティ 文末表現 機能 用法

### 1 問題の所在

「のだ」<sup>1</sup>は、吉田(1988:52)に従えば、告白、教示、強調、決意、命令、発見、再認識、確認など、多様な用法をもちうる文末形式である。「のだ」についてはすでに数多くの先行研究があるが、1990年ごろまでの先行研究の主流は、そのような「のだ」の多様な用法をいかにして一つにまとめ、その中核的機能を取り出すかというところにあった。その結果、「のだ」の本質とでもいうべき、中核的機能については、多少の差異はあるが、すでに、ある程度まとまった見解が得られているといえる。

「のだ」は、準体助詞「の」に判断の助動詞「だ」がつき(佐治1972)、それが一語化したものである(三上1953a)<sup>2</sup>。そのため「のだ」は、「の」として客体的に捉えられた事態を「だ」をつけて発話時の判断として捉えなおす、いわば二重性をもった表現であり(林1964)<sup>3</sup>、その二重性が、「説明」(Alfonso1966、久野1973、田中1980、寺村1984、奥田1990、益岡1991など)、「言い換え」(山口1975)、「因果関係」(松岡1987、1993)、「背後の事情」(田野村1990)といったことばで捉えられ、記述されてきている。「のだ」研究の集大成である野田(1997)は、ムードの「のだ」とスコープの「の(だ)」に分け

<sup>1</sup> 先行研究の慣例に従い、「のだ」「のである」「のです」「の」「んだ」「んです」などのバリエーションを「のだ」という形式で代表させることにする。

<sup>2</sup> 三上(1953a:234)が言うところの「連体法の内部の主格を「ノ」に変えることのできる性質」、いわゆる「ガノ可変」を、「のだ」が失っているからである。

<sup>3</sup> 林(1964:286)の「ノ(ダ)は、かくて二重判断の第二次の判断にあずかる。しかしかという判断(の内容・事実)が成立する、という判断に関係する」による。

るという独自の二分法を採用している(小金丸 1990)が、「の」の前接部分を名詞化して提示する点で「のだ」の機能に統一性を見いだそうとしている点(野田 1997:16,20)ではそれまでの先行研究の流れのなかにあると見ることができる。

しかし、このような一連の「のだ」の本質を取り出す研究では、多様な用法から中核的機能を抽出することはできても、中核的機能から多様な用法がいかんして生まれるのかを知ることにはできない。つまり、「のだ」のついた文がどのような用法を持ち、その根底にどのような機能が働いているかを理解主体の「の」がわから理解するための道具立ては揃ったのであるが、ある文を表現するときに「のだ」をつけて表現すべきなのか、「のだ」をつけて表現した場合にどのようなニュアンスが付加されるのかという、表現主体の「の」がわから「のだ」の用法の解明は、手がつけられないまま放置されてきたのである(庵 2000)。そのため、2000年に入り、「のだ」の研究を学習者の「のだ」習得に役立てたいと考える日本語教育の立場から、相次いで表現主体の「の」がわから見た「のだ」の研究が発表された。庵(2000)、菊地(2000)、石黒(2000)がそれである。

庵(2000)は、野田(1997)の二分法の流れを汲むもので、特にスコープの「の(だ)」を産出面からわかりやすく整理したものである。また、菊地(2000)は、「のだ」を統一的に理解しようという立場に立ちながらも、庵(2000)と同様に「のだ」を産出面から整理したものであり、その捉え方はきわめて明快であり、参考になる。

ただ、惜しむらくは、庵(2000)は、スコープの「の(だ)」のみを扱ったものであり、野田(1997)の言うムードの「のだ」、庵(2000)の言う関連づけの「のだ」は扱われていない。また、菊地(2000)は、「のだ」を統一的に理解しようとする論考であるため、庵(2000)にくらべ、「のだ」の用法より広い範囲をカバーしてはいるものの、それでも、「のだ」の全体像をカバーしきれていない(菊地 2000:37)。その意味では、石黒(2000)が「のだ」の全体像をもっとも広くカバーしているといえるが、未整理な部分が多い、試論の域を出ない論考であるという感が否めない。

そこで、本稿は、「のだ」の全体像を視野に入れつつ、石黒(2000)で未整理な部分を改め、より整理した形で「のだ」の原理を提示することを目指した。もちろん、不十分な点も多いかとは思いますが、産出的な側面から見た「のだ」の原理を包括的に描くことで、本稿は、ささやかながら日本語教育に役立つ「のだ」研究になりうるものと考えている。

本稿では、産出時に働く「のだ」のメカニズムを明らかにするために、「のだ」の機能の中心にある中核的機能と、それを支える四つの派生的機能を設定する。そして、その四つの機能のいずれか、または複数の機能を満たすとき、「のだ」が使われることを論証する。また、「のだ」の多様な用法も、「のだ」の中核的機能に由来するこの四つの派生的機能を吟味することによって、必然的に導き出せるものであることを示したい。

本稿の構成であるが、「2 「のだ」の中核的機能」で「のだ」の中核的機能を定義し、「3 不十分な認識の諸相」と「4 十分な認識と入力」でその中核的機能の定義に用いた「不充

分な認識」「充分な認識」という用語について議論する。「5「のだ」の充填機能」「6「のだ」の訂正機能」「7「のだ」の共有機能」「8「のだ」の前提機能」で「のだ」の四つの派生的機能について論じ、最終の「9 まとめ」で、それまでの議論をまとめる予定である。

## 2 「のだ」の中核的機能

1「問題の所在」で述べたように、「のだ」が認識の二重性を持っているというのは、先行研究における共通理解になっている。そのことは、認識の二重性を持たない文には「のだ」がつけられないことからわかる。

(1) A：(居酒屋で注文を決めるさいに)? 何をお飲みになるんですか。

B：?ビールをいただくんです。

田野村(1990:56)が「まだ定まっていないことがらについて、考慮の上で返答するよう相手に求めるという状況」では「のだ」が使えないと述べているように、何を飲むかを決めることは、前もって決まっていることではなく、その場、つまり発話時点で決めることだからである。発話時点で決める以上、認識の二重性はないわけである。

(2) A：すてきなかばんですね。どこで買ったんですか。

B：これですか。近所の質屋で買ったんです。

一方、(2)のような文には「のだ」がついても問題ない。むしろ、「のだ」がつくほうが自然である。「そのかばんを買った」という認識は話し手と聞き手との間ですでに共有されており、発話時点では「どこで」買ったかだけが問題にされている、つまり認識の二重性を備えているからである。

本稿では、認識の二重性について、話し手や聞き手がすでに持っている認識を既存の認識、話し手や聞き手の発話の時点での認識を発話時の認識と呼ぶことにしたい。そうすると、たとえば(2)のAにおける既存の認識は「すてきなかばんを買った」こと、(2)のBにおける発話時の認識は「近所の質屋ですてきなかばんを買った」ことになる。

「のだ」が使われると、既存の認識、発話時の認識からなる認識の二重性が存在するということに加え、話し手または聞き手いずれかの既存の認識が不十分なものであり、それが発話時に十分なものになるということも、あわせて示される。この点が、先行研究で示されなかった重要な点である<sup>4</sup>。

たとえば、(2)のAの発話において、話し手Aの認識は「どこで」買ったかがわからない

---

<sup>4</sup> 先行研究では、寺村(1984:309)の、「～ノダを誘発するのは、ある状況を認識して、それを理解しよう、あるいは相手に理解させようという気持である」という見方や、益岡(1991:141)の、「花子が泣いている。大事にしていたカードがなくなったのだ。」という例文における「花子が泣いている」という叙述がそれだけでは充足的でない場合があるということである。「大事にしていたカードがなくなった」という命題は、「なぜ、そのようなことが起こったのか」という課題に対する答えを表現する」という説明が、こうした「のだ」のとりえ方の参考になる。

という点で不十分なものであり、話し手Aはその不十分な認識を十分なものにしたいということを示すために「んです」をつけていると考えられる<sup>5</sup>。一方、(2)のBでは、話し手Bが「近所の質屋で」買ったという発話をするので、聞き手Aの認識が十分なものになることが示される<sup>6</sup>。本稿ではこれを「のだ」の中核的機能と考える。

「のだ」の中核的機能：「のだ」の中核的機能は、話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充分になることを示すことにある<sup>7</sup>。

この「のだ」の中核的機能の定義は母語話者の直感に合うものであると考えられる。たとえば、(2)のAやBの発話のように文の一部の要素に焦点が当たっている場合はもちろん、以下の(3)のように文全体に焦点が当たっている場合にしても、「のだ」がつくことで聞き手の不十分な認識が十分なものになったと考えれば説明がつく。

(3) 今回の行革はカレーライスがライスカレーになったようなものだ。名前が変わっただけで、中身は何も変わっていないのだ。

他にも、「のだ」のつく文は、書きことばでは段落の終わりにつき、その段落の内容をまとめる働きをすることが多いということも挙げられる(林 1964:287)が、そうした現象も、段落の途中ではいまだ不十分であった認識が、段落の終わりの文で初めて充分になるということを示すと考えれば理解しやすい。

また、この「のだ」の中核的機能の定義は、一見かけ離れたように見える「のだ」を、一つのものとして捉えることを可能にする。

(4) (地面が濡れているのを見て)「きのう雨が降ったんだ！」

(5) A：(彼女を連れているAが唐突に)おれたち、今度結婚するんだ。

B：そうか。結婚するんだ。おめでとう。

(4)では、「地面が濡れている」だけでは、その理由がわからないという意味において、話し手の既存の認識は不十分なものであったが、「きのう雨が降った」ということを推論によって発見したことで、どうして地面が濡れているか、理由も含めて十分に理解することができたということが「のだ」を使えば示せる。また、(5)のAやBの発話でも、Aが結婚するとは思ってもみなかったという意味で不十分な認識しか持っていなかったBが、Aの告白を聞くことで充分な認識になったことを示していると捉えることができる。

とはいえ、(4)と(5)の不十分さにはずいぶん開きがあるように思われる。不十分な認識というものが一体どのようなものであるかを考えなければ、この定義は十全なものとは言えな

<sup>5</sup> そのため、(2)のAの発話は、「どこでそのかばんを買いましたか」にくらべ、教えてほしいというニュアンスが強く出る。

<sup>6</sup> そのため、(2)のBの発話は、「近所の質屋で買いました」にくらべ、教えてあげるというニュアンスが強く出る。

<sup>7</sup> また、疑問文の場合、「のだ」の中核的機能は、話し手の既存の不十分な認識を充分にするよう聞き手に求めることを示すことにある。一方、「のだ」がつかない表現は、既存の認識がない、または問題にしないことを示しているといえる。

いだろう。そこで次の3では、不十分な認識について検討する。

### 3 不十分な認識の諸相

結論から述べると、不十分な認識という場合、その不十分さには大きくは二通りある。

(6) A : すてきな**かばん**ですね。どこで買ったんですか。

B : これですか。近所の質屋で買った**ん**です。

(7) A : おまえ、また庭の植木鉢を割**っ**ただろう。

B : 僕じゃないよ。お兄ちゃんが割**っ**た**んだ**。

一つは、既有の認識に、いわば認識のすき間とでも言うべき、欠けたところがあると考えられるものである。(6)のBで言えば、「すてきな**かばん**を買った」という既有の認識は「近所の質屋で」という場所を欠き、そこに認識のすき間ができています。そのため、その認識のすき間を埋めるということを示す意味で、「近所の質屋で買った」に「**ん**です」がつけられているのである。

もう一つは、(7)に見られるような、認識のすき間はないが、その認識自体が誤っていると思われるものである。(7)では「Bが庭の植木鉢を割**っ**た」というAの既有の認識にはすき間はない。しかし、Bの認識からすれば、Aの既有の認識は「Bが割**っ**た」という点で誤ったものである。そのため、「Bが割**っ**た」という既有の認識の誤りを指摘するために、「お兄ちゃんが割**っ**た**んだ**」と「**んだ**」をつけ、Aの既有の認識にある誤りを修正したことを示しているのである<sup>8</sup>。このように、認識の不十分さは、認識にどこかすき間があるものと、修正を必要とする誤った先入観、いわば思い込みが含まれている場合とがある。以下では、すき間がある認識、思い込みがある認識という二つの認識の不十分さを軸に、どのような認識が不十分であり、それをどう修正されて十分な認識になるのかを見ていくことにしたい<sup>9</sup>。

#### 3.1 すき間がある認識

すき間がある認識において、典型的なのは成分の欠落である。成分の欠落は、疑問語疑問文や疑問語疑問文にたいする返答、さらには疑問語疑問文を下敷きにした発想の文に見られる。(8)のような、ガ格、ヲ格などの必須格成分の欠落と、(9)のような、トキ、トコロなどの周辺の状況成分の欠落とに分かれ、前者が欠けている場合は不十分な認識として問題にされることが多いが、後者は必須の格成分ではないので、話し手の意識やその場の状況、文

<sup>8</sup> このような「のだ」について、三上(1953b:26)に「正誤訂正的」という指摘がある。

<sup>9</sup> ここで、一つ断りを述べておきたい。それは、不十分な認識、十分な認識というのは、客観的に存在するものではなく、話し手が判断するものであるということである。特に、論文のような説明や説得を目的とするような文章では、「のだ」の使用頻度にかかなりの個人差があり、今村(1996)が指摘するように「のだ」のさじ加減が必要になってくることが多い。その意味で「のだ」は、他の文末表現よりも、つけるかどうか、話し手の裁量にゆだねられている部分が多いといえる。

脈などによって不十分な認識として問題にされるかどうかが決まる。

(8) A : (母親がテレビを見ている息子に目を留めて) 熱心に見てるわね。今日は、誰が出てるの。

B : あややが出てるんだ。

(9) A : すてきなかばんですね。どこで買ったんですか。

B : これですか。近所の質屋で買ったんです。

(8)のBで「あややるんだ。」、(9)のBで「近所の質屋なんです。」などとも言えないことはないが、一般的には、成分の欠落は、一文のなかに既有の認識と発話時に加わった認識の両方を含む、いわゆるスコープの「のだ」として表されることが多い<sup>10</sup>。

一方、理由がわからないと落ちつかない事態が既有の認識として存在し、その理由がすき間として認識された場合、話し手の推論が働いてその理由を見つけ、認識のすき間を埋めることがある。

(10) (地面が濡れているのを見て) 「きのう雨が降ったんだ！」

理由のように一つの事態として捉えられるものの場合、(10)のように、発話時に加わった認識だけを含む、いわゆるムードの「のだ」として表されることが多い。もちろん、(11)のように、一文のなかに既有の認識と発話時に加わった認識の両方を含む、いわゆるスコープの「のだ」としても表現することは可能であるが、やや冗長な感がある。

(11) (地面が濡れているのを見て) 「きのう雨が降ったから地面が濡れているんだ！」

また、対話においては、以下のように表現することもありうる。

(12) A : どうして地面が濡れているんだろう。

B : きのう雨が降ったからじゃない。

A : そうか。だから、地面が濡れているんだ。

以上から、「雨が降ったから地面が濡れている」という関係で、「雨が降った」という理由がすき間として認識されているとき、3通りの表現の仕方がありうるということがわかる。そのうち、理由だけを提示する場合は接続詞などは不要であるが、理由がすき間として認識されている以上、結果を提示する場合は接続助詞のついた理由節、または接続詞とともに示さなければならない。つまり、理由が、発話時に加わった認識になっているので、「のだ」文には必ず理由にかかわる部分が含まれていなければならないのである<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> 名詞文に「のだ」がつきにくいという指摘については田野村(1990:127-130)を参照のこと。名詞だけを取り出して答えるなら、(8)(9)も、「あやや」「近所の質屋です」と答えるほうがむしろ自然な感じがする。

<sup>11</sup> 発話時に加わった認識を当該の文に含んでいなければならないというのは「のだ」「からだ」に共通する性格である。ただし「わけだ」にかんしては、「山田さんは小学生のころイギリスに住んでいたんだよ」「道理で英語の発音がきれいなわけだ」のような「理由がわかった」という用法を持つ文にかぎっては、既有の認識のみから文を構成することができる。

理由によく似たものに根拠がある<sup>12</sup>。理由との違いは、既存の認識として示されるのが既定の事態ではなく、話し手の判断であり、その話し手の判断を説得力を持って聞き手に伝えるために、その後が続けて、判断の根拠を「のだ」をつけて示すところにある。判断は根拠とともに示して初めて十分なものとなる。

(13)彼女はやさしい人だよ。私がコンタクトを落としたとき、1時間も一緒に探してくれたんだ。

結果がわからないと落ちつかないもの、つまり、事態の行く末がすき間として認識されるものもある。

(14)彼は弁護士を目指してこれまで毎日10時間勉強を続けてきた。その結果、ついに今年の司法試験に合格することができたのだ。

理由と結果はしばしば混同されるが、截然と区別しておくことが必要である。(12)の理由では、既存の認識が「地面が濡れている」、発話時に加わった認識が「だから」(＝「きのう雨が降ったから」)であるのにたいし、(14)の結果では、既存の認識が「その結果」(＝「彼が弁護士を目指してこれまで毎日10時間勉強を続けてきた結果」)、発話時に加わった認識が「ついに今年の司法試験に合格することができた」である。つまり、理由のほうは「だから」という接続詞に焦点が当たっているのにたいし、結果のほうは「ついに今年の司法試験に合格することができた」という事態そのものに焦点が当たっているのである。

これまで見てきたものは、既存の認識に何らかの要素が欠けていたものである。成分の欠落はもちろん、理由や根拠の欠落には接続助詞「から」をつければ、結果の欠落にも接続助詞相当語「結果」をつければ、既存の認識と発話時の認識を一文のなかに同時に表すことができる。しかし、次に見る言い換えは、前提に何らかの要素が欠けているわけではなく、したがって既存の認識と発話時の認識を一文のなかに押しこむことができない<sup>13</sup>。また、聞き手がいないと現れないという点でも特徴的である。

(15)今回の行革はカレーライスがライスカレーになったようなものだ。名前が変わっただけで、中身は何も変わっていないのだ。

「今回の行革はカレーライスがライスカレーになったようなものだ。」では、欠けている要素を指摘することはできない。しいて言うなら、具体性に欠けているという、内容面の指摘になろう。しかし、「今回の行革はカレーライスがライスカレーになったようなものだ。」という文だけでは、聞き手の認識が不十分であり、「名称が変わっただけで、中身は何も変わっていないのだ。」が示されて初めて聞き手の認識が充分になるという点では、要素が欠けているものと何ら変わるものではない。その意味で、このような言い換えも、既存の認識にすき間があるものとして扱うことにする。

<sup>12</sup> 理由と根拠にかんする考察は、田中(1980)が詳しい。

<sup>13</sup> 吉田(1988)では、言い換えは「二句一文」のものとして、「一句一文」である他のものと区別して記述されている。

紙幅の都合上、ここで挙げたものが、既存の認識にすき間があるもののすべてというわけではない。目的や手段、様態といったものが欠けていて、そうしたすき間を埋めたことを示すために「のだ」がつくことも考えられる。ただ、ここで大切なのは、既存の認識に何らかのすき間があって、そのすき間ゆえに既存の認識が不十分なものと感じられ、そしてそのすき間を埋める表現に「のだ」がつくことによって、その既存の不十分な認識が十分な認識になったということを示せることである<sup>14</sup>。この既存の認識のすき間を埋める機能が、5で説明する派生的機能の一つ「充填機能」につながっていく。

### 3.2 思い込みがある認識

ここでは、既存の認識に思い込みが含まれているものを扱う。ただ、一口に思い込みのといっても、以下の(16)と(17)では、思い込みの程度に違いが見られるように思われる。

(16) A : (彼女を連れているAが唐突に) おれたち、今度結婚するんだ。

B : そうか。結婚するんだ。おめでとう。

(17) A : (彼女を連れているAが唐突に) おれたち、今度結婚するんだ。

B : えっ、うそ。結婚するんだ。お前たち、結婚しないって言ってなかったっけ？

(16)の場合、Bの既存の認識は、「結婚するとは思ってもみなかった」くらいであると考えられるが、(17)の場合、Bの既存の認識は、「てっきり結婚しないと思っていた」である。前者の思い込みは「知らなかった」という程度の漠然としたものにとどまるが、後者の思い込みには「そうではないと思っていた」という否定の意識がはっきりと働いている。ここでは、前者を弱い思い込み、後者を強い思い込みと呼んで、区別しておく<sup>15</sup>。

「のだ」は、特に対話でしばしば、驚き、意外、疑い、不満などの感情的な意味を帯びるが、「のだ」がこうした感情的な意味を帯びるのは、多くの場合、既存の認識と発話時の認識が食い違うからにほかならない。(16)のような弱い思い込みのある認識のときは、驚きや意外さといった比較的弱い感情を表し、(17)のような強い思い込みのある認識のときは、疑いや不満といった比較的強い感情を表す傾向がある。すき間のある認識を埋める場合につけられる「のだ」の場合、そうした感情的な意味を帯びることはまれである。

同様に、強い思い込みを持つ「のだ」の肯否疑問文が否定の傾き<sup>16</sup>を有する現象も、既有

<sup>14</sup> また、疑問文のように上昇イントネーションで発話した場合は、その既存の不十分な認識を十分なものにするように聞き手に求めていることを示せることにある。

<sup>15</sup> 聞き手が弱い思い込みを持っていると思われるときは「実は」が、強い思い込みを持っていると思われるときは「本当は」(疑問文の場合は「本当に」)が、「のだ」と共起することが多い。たとえば、(16)のAの発話では、「おれたち、実は今度結婚するんだ。」、(17)のAの発話では、「おれたち、本当は今度結婚するんだ。」、(17)のBの発話では、「えっ、うそ。本当に結婚するの?」とすれば、弱い思い込みか、強い思い込みかの区別が明確になる。

<sup>16</sup> 「傾き」という用語については仁田(1991:148-149)を参照のこと。なお、同じく仁田(1991:178-179)には、(18)のようなタイプの肯否疑問文について、「エッ! 山田が来るの?」や「これが論文なの?」という文は、「これらの文の発話者が、事態・事柄の成立を本当に判



の認識と発話時の認識の食い違いという観点から説明できる。

(18) (授業中、突然「先生、質問!」と発言した学生にむかって先生が)「質問があるんですか?」

(18)には先生の既存の認識に、学生に質問がないという強い思い込みが存在したと考えられる。もし先生の側にそうした思い込みがなければ、学生が「先生、質問!」と言った時点で、その質問の内容を述べるよう、促すはずである。学生の「先生、質問!」という発話から考えて、質問があることは明白であるにもかかわらず、先生が「質問があるんですか?」と問い返したということは、先生の側に学生に質問がないという思い込みがすでに存在し、それが「先生、質問!」という学生の発話と食い違ったことを示している。したがって、先生の既存の認識に「質問がない」という強い思い込みがあったぶんだけ、「質問がありますか?」と問う場合よりも「質問がない」という否定の傾きを帯びるのである。

以上、既存の認識に思い込みがある例についてみた。こうした思い込みを修正する機能は、6で説明する派生的機能の一つ「訂正機能」につながっていくことになる。

#### 4 十分な認識と入力

不十分な認識についてすでに考察してあるので、十分な認識についてあらためて説明しなおすことはないだろう。既存の認識にすき間がある場合、そのすき間が埋まったものが十分な認識であり、既存の認識に誤りがある場合、その誤りが修正されたものが十分な認識だからである。

ただ、そのなかで問題にされていないことが一つある。不十分な認識が十分な認識になるといっても、自動的に十分な認識に変わるものではない。既存の認識にすき間がある場合は、そのすき間を埋めるような情報が、あるいは、既存の認識に誤りがある場合は、その誤りを訂正するような情報が存在しなければ、不十分な認識が十分な認識に変わることはない。既存の認識のすき間を埋めたり、既存の認識を訂正したりする情報が入ってくることを入力と呼ぶことにすると、「のだ」がつくことによって、当該の事態の背後に何らかの入力が存在することが暗示されるのである。その場合、入力がどこからなされるのかが問題になる。

入力は、独話でも可能なものと、対話でない不可能なものに大きくは分けられる。独話でも可能なものからまずは見てみたい。以下の(19)、(21)、(22)は、いずれも独話として考える。その特徴は野田(1993)が指摘するとおり、「のだ」を「の」や「のです」に変えられないところにある。

(19) (地面が濡れているのを見て)「きのう雨が降ったんだ!」

(19)は、話し手の推論によって認識のすき間が埋まった例である。地面が濡れているのを

---

定しかねているのではなく、既に[山田八来ナイダロウ][コンナモノハ論文デハナイ]といった予断を持っている、といったことを示して」おり、「提示された状況を前提にして、それに対して、不服・不承認的な反応として発せられるものである」という指摘がある。

見て、どうして地面が濡れているんだろうと不思議に思った話し手が考えた結果、思いついたものである。したがって、この例の入力は推論である。

推論の入力が働いている「のだ」の文では、推論の根拠が言語的に明示されない場合でも、根拠を伴う話し手の判断を表していると感じられるので、聞き手は根拠をふくめて「のだ」の文を理解しようとする。特に肯否疑問文の場合、そうした「のだ」の文は根拠のある疑問文として解されるため、(18)とは反対に肯定の傾きを有し、確認という表現効果を帯びる。

(20) (授業中、隣の席の学生に小声で話してかけている学生に先生が)「質問があるんですか？」

(20)は、当該の学生が小声で話しているという既存の認識から、話し手である先生が推論を働かせ、「質問がある」という結論に達したが、その推論が正しいかどうかわからないので、直接その学生に問うて確認をしたと考えることができる。

推論による入力に似たものに、記憶による入力がある。

(21) (時計を探して)「そうだ。きのうお風呂に入るときに外したんだ。」

記憶による入力は、話し手が自分の頭で考えて、既存の認識のすき間を埋めたという点では、記憶による入力に似ている。ただ、話し手が自分の記憶を検索して、思い出したという点では推論と異なるので、この例の入力を記憶とし、推論と区別しておく<sup>17</sup>。

さらに、話し手自身による入力に、外部の状況を知覚することによる入力がある。

(22) (パーティーで先生を見かけて)「なんだ。先生、パーティーに来てたんだ。」

(22)では、おそらく話し手が「今日、先生はパーティーに来ない」という既存の認識を持っていたものと想定される。ところが、話し手が現実にパーティー会場で先生を見かけたことによって、その既存の認識が訂正されたのである。これは、推論や記憶のような話し手の内面からの入力とは違い、話し手が外部の状況から情報を得たものである。したがって、この例の入力は外部の状況とする。

対話でないとは不可能な入力はいうまでもなく、話し手や聞き手といった話し相手から得る入力である。

(23) A : (彼女を連れているAが唐突に)おれたち、今度結婚するんだ。

B : そうか。結婚するんだ。おめでとう。

(23)のAでは、話し手Aが聞き手Bに「おれたち、今度結婚するんだ。」という発話をとおして情報の入力をおこない、一方、Bでは、話し手Bが聞き手Aにたいし「結婚するんだ。」という発話をとおして聞き手からの情報の入力を確認している。

情報の入力では、その入力先がどこであるかによって、次章以降で論じる「のだ」の派生的機能が違ってくるため、「推論」「記憶」「外部の状況」といったような独話でも可能な

<sup>17</sup> 区別するもっとも大きい理由は、三上(1953a)以来繰り返し指摘されてきているように、「そうだ。きのうお風呂に入るときに外したんだ。」のように「のだ」を取りうる点にある。

ものと、「話し手」「聞き手」といった対話でない不可能なものという区別が重要になる。特に、対話において一方のみが有する認識を、発話という情報の入力によって双方が共有する後者の機能が、7で説明する派生的機能の一つ「共有機能」につながっていくことになる。

## 5 「のだ」の充填機能

2から4にかけて、「のだ」の中核的機能の定義、およびその定義に出てくる「不十分な認識」「十分な認識」の意味について説明した。本章以降では、その中核的機能の定義にもとづいて、四つの派生的機能について説明していくことになるが、そのまえに中核的機能、派生的機能および個々の用法の関係について検討しておきたい。

1の冒頭で述べたように、「のだ」には多様な用法が存在する。中核的機能からこの多様な用法に直接つながっていくことを示せば理想的だが、これまでの「のだ」の研究史が示すように、そうした一つの中核的機能からさまざまな用法に直接つながっていくことを示すのはきわめて困難である。そこで本稿では、中核的機能を個々の用法につなげていくための橋渡しの機能として、充填機能、訂正機能、共有機能、前提機能の四つの機能を設定することが有効であることを主張する。

これらの派生的機能は中核的機能と矛盾するものではもちろんない。むしろ、既存の不十分な認識が発話時に十分なものになったことを示すという「のだ」の中核的機能を四つの側面から具体化するものである。実際の記述においては、この四つの派生的機能が、既存の認識のあり方や入力とあいまって、どのような用法につながっていくか、一つ一つ見ていくことにしたい。

「のだ」の派生的機能の第一は「のだ」の充填機能である。独話においては話し手、対話においては話し手と聞き手双方が既存の認識として持っており、かつそれが発話時の認識においても変わることなく保持されている認識を「前提認識<sup>18</sup>」、発話時において、話し手、聞き手いずれかの不十分な認識に新たに付け加わる認識を「すき間認識<sup>19</sup>」と名づけると、前提認識にすき間認識が加わったことで、既存の認識のすき間が埋まったことを示す機能がこの充填機能になる。この充填機能は聞き手の存在を必ずしも必要としないという点で対事的機能と見ることができ、不十分な認識が十分なものになったことを示す「のだ」の中核的機能のうち、対事的側面を取り出したものである。具体例で見てみよう。

(24) (地面が濡れているのを見て)「きのう雨が降ったんだ！」

(24)において、「地面が濡れている」というのが前提となっている不十分な認識、「きのう雨が降った」がすき間認識であり、不十分な認識を十分な認識にするものでもある。図式

---

<sup>18</sup> 「前提」と略記することがある。

<sup>19</sup> 「すき間」と略記することがある。

化する<sup>20</sup>と以下のようになろう。

既有的認識		入力：推論	発話時の認識	
	話し手			話し手
前提			前提	
すき間	21		すき間	

当初、話し手は「地面が濡れている」ことを認識し、どうして地面が濡れているのだろうと考えた。それが既有的認識である。既有的認識の段階では、話し手の認識には、地面が濡れている理由がわからないという点ですき間があり、そのため、話し手は自らの認識を不十分な認識と考えている。しかし、発話時点にいたって、その認識のすき間を話し手が自らの推論で埋め、十分な認識としたことが「のだ」によって示されている。

このような構図を取るもののうち、(24)のような、推論による入力の場合は「発見」、以下の(25)のような、記憶による入力の場合は「想起」、(26)のような、外部の状況からの入力の場合は「納得」と解されることが多く、入力によって用法が異なってくる。

(25) (時計を探して)「そうだ。きのうお風呂に入るときに外したんだ。」

(26) (朝起きると、そとでガリガリという音がする。雨戸を開けてみて)「なんだ。猫が爪を研いでたんだ。」

(24)から(26)まではいずれも充填機能のみが働いた例である。他の機能とともに働くものについては、それぞれの章で扱うことにする。

## 6 「のだ」の訂正機能

### 6.1 訂正機能のみが働く場合

「のだ」の派生的機能の第二は「のだ」の訂正機能である。訂正機能は、3の不十分な認識のところで述べた二つの認識のうち、思い込みのある認識に対応するものであり、既有的認識に誤りがある場合、その既有的認識が発話時に正しい認識に取って代わられたことを示す機能である。訂正機能もまた、充填機能と同様、聞き手の存在を必ずしも必要としないという点で対事的機能と見ることができる。

(27) (ラッシュの電車で初めて乗る人が独り言で) 朝の電車って、こんなに混んでるん

<sup>20</sup> 本稿では、前提・すき間という縦軸と、話し手・聞き手という横軸による2×2(前提・すき間の対立、話し手・聞き手の対立がない場合もあるので、1×1、1×2、2×1のこともある)の表によって、「のだ」の機能を図式化するが、こうした図式化のもとになる考え方として、野田(1997:104)の「対事的モードのみを担うか、对人的モードも担うか、という軸と、事態Qを状況や先行文脈Pと関係づけているか、関係づけていないか、という軸とで四つに分類するのが適当である」という指摘が挙げられる。ただし、野田(1997)はそうした十字分類をモードの「のだ」の枠のなかで考えており、スコープの「のだ」はまた別の扱いになる。そうした二分法を採らない本稿とはその点で異なるものと思われる。

<sup>21</sup> 「」はそこに認識のすき間があることを表す。

だ。

話し手は、ラッシュの電車といっても、そんなに混んでいないだろうという漠然とした思い込みを抱いていた。しかし、初めてラッシュの電車に乗ろうとして、自分が持っていたイメージより、実際の電車のはるかに混んでいたことを初めて認識したのである。つまり、話し手が外部の状況を認識することで、漠然と抱いていた思い込みが訂正されたことを「のだ」で示したものと考えられる。

既存の認識		入力：外部の状況	発話時の認識	
	話し手			話し手
認識	22		認識	

表から明らかなように、訂正機能の場合、前提認識とすき間認識の区別が必要ないことがある。充填機能の場合、既存の認識が前提とすき間からできているため、必ず二つに分ける必要があるが、訂正機能の場合、既存の認識が正しいか正しくないかの問題なので、二つに分ける必要がない場合が存在しうる。

## 6.2 訂正機能と充填機能がともに働く場合

前節で述べたように、訂正機能の場合は1行1列の表になりうるが、一般的には、訂正機能においても、2行1列の表で表せるものが多い。これを、訂正機能と充填機能がともに働く場合として考えてみたい。

(28) (エスカレーターで話し手自身をのぞいてみんな右に立っていることに気がついて)「大阪では左側をあけるんだ。」

既存の認識		入力：外部の状況	発話時の認識	
	話し手			話し手
前提			前提	
すき間			すき間	

話し手は、エスカレーターに乗るときのマナーとして、急いでいる人のためにエスカレーターの一方の側に立つということは知っている。しかし、どちらの側に立つべきかということにかんして話し手には思い込みがあった。その思い込みを外部の状況を観察することによって訂正したわけで、その意味で、充填機能と訂正機能の両方が働いている。

## 7 「のだ」の共有機能

### 7.1 共有機能と充填機能がともに働く場合

「のだ」の派生的機能の第三は「のだ」の共有機能である<sup>23</sup>。共有機能は対話、つまり話

<sup>22</sup> 「 」は、思い込みの認識を表す。

<sup>23</sup> 「共有」という名称はマクグロイン(1984:255)の共有の情報(shared information)によ

話し手と聞き手の両者が存在して初めて可能になる機能である。充填機能と異なり、聞き手の存在を必ず必要とするという点で、この共有機能は対人的機能と見ることができ、不十分な認識が十分なものになったことを示す「のだ」の中核的機能のうち、対人的側面を取り出したものである。

話し手、聞き手いずれか一方のみが知っている十分な認識をもう一方の相手に伝え、その相手の不十分な既存の認識を十分な認識へと変える。つまり、入力、話し手、聞き手いずれかによってなされるのである。

ただし、このような「のだ」が使われるとき、一般に話し手と聞き手の双方が共有する既存の知識、つまり前提が存在することが多いため、入力が話し手、聞き手いずれかによってなされた結果、もう一方の認識のすき間が埋められることになり、結果として充填機能も兼ね備えることになる。たとえば、以下のような場合である。

(29) A : すてきなかばんですね。どこで買ったんですか。

B : これですか。近所の質屋で買ったんです。

Aの既存の認識

	話し手	聞き手 <sup>24</sup>
前提		
すき間		

入力：なし

Aの発話時の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間	? <sup>25</sup>	

Bの既存の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		

入力：話し手

Bの発話時の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		

Aは、Bがそのかばんを買ったということまではわかっている。つまり、「かばんを買った」という事実はAとBの共通理解、すなわち前提になっている。しかし、そのかばんをどこで買ったかということは買った本人ではないAにはわからない。Aとしては、Bがそのかばんをどこで買ったかということまでわかって初めて十分な認識を得られると考えている。そこで、Aは自らの認識のすき間を埋めるべく、「のだ」をつけてBに質問している。これは「説明要求」の用法である。このように、「のだ」をともなう疑問文の場合、話し手の既存の認識だけでなく、発話時の認識も不十分なものであるため、発話時に文末のイントネーションを上げて、聞き手に入力を要求することになる。

一方、Bは、最初のAの発話によって、Bがかばんを買ったことまではわかっているが、

る。また、菊地(2000)も情報の共有という役割を重視した、本章の内容を先取りした優れたモデルである。

<sup>24</sup> この表そのものは発話者である話し手の頭のなかにあるものであるため、聞き手の認識は、実際の聞き手の認識ではなく、話し手が想定している聞き手の認識を示している。

<sup>25</sup> 「？」は相手(聞き手または話し手)にたいする入力の要求、期待を表す。

かばんをどこで買ったかはわかっておらず、その認識のすき間をB自身の発話で埋めてほしいとAが考えていることを理解する。そこで、Bは、かばんを買った場所を発話することでAの認識のすき間を埋め、Aの既存の不十分な認識を十分な認識に変えようとする。これはいわゆる「説明」の用法である。

既存の認識にすき間がある「のだ」にかんして、上の表(特に、疑問文ではないBの発話のほう)との関係でいうと、「のだ」というのは、要するに、既存の認識(左側の表)の「 」をめぐる表現であり、その「 」を発話時(右側の表)に「 」に変えることがすなわち不十分な認識を十分なものにすることである。そして、左側の表の「 」を縦の方向で埋めようとするものが充填機能、横の方向で埋めようとするものが共有機能ということになる。上の表の場合、入力話し手によって行われているため、共有機能が第一に働いた例と見ることができ、その入力によって聞き手がもっていた既存の認識のすき間が埋まるため、結果として縦方向の充填機能も働いたと見ることができるのである。

## 7.2 共有機能と訂正機能がともに働く場合

次に、共有機能が訂正機能とともに働く場合について検討したい。

(30) A : (彼女を連れているAが唐突に)おれたち、今度結婚するんだ。

B : そうか。結婚するんだ。おめでとう！

まず、Aの発話について考えてみる。Aは、自分たちがBに結婚するということを伝えていない以上、BはAとその彼女が結婚するとは思ってもいないだろうと考えている。つまり、Bには、Aとその彼女が結婚しないだろうという漠然とした思い込みがあると思っている。そうした既存の認識があるため、「今度結婚する」に「のだ」をつけて、Bの不十分な認識を十分なものにできるのである。

ここでは、聞き手の思い込みを訂正する訂正機能だけでなく、共有機能も働いている。話し手だけが知っている大切な情報を、話し手自身の発話によって入力することによって得られる共有機能は、このような「告白」の用法に特に強く働くように感じられる。

Aの既存の認識

	話し手	聞き手	入力：話し手
認識			

Aの発話時の認識

	話し手	聞き手
認識		

一方、Bの発話は、Aの発話を繰り返すものになっている。Aとその彼女が結婚しないだろうという漠然とした思い込みがあったBは、Aの発話によってそうした思い込みを訂正された。その驚きを込めて、Aから得た新しい情報を「のだ」をつけて確認している。

Bの既存の認識

	話し手	聞き手	入力：聞き手
認識			

Bの発話時の認識

	話し手	聞き手
認識		

(30)のAと同じ構図を持つ用法は多い。

(31)信じてくれ。俺は何もやっていないんだ。

(32)反対しても無駄だよ。僕はアメリカに留学すると決めたんだ。

(33)何やってるんだよ。走れ。一塁ベースにむかって走るんだ。

(31)は「主張」、(32)は「決意」、(33)は「命令」の用法である。いずれの例においても大切なのは、聞き手の既存の認識が話し手の認識と食い違っているという点である。(31)では、自分は何もやっていないと考える話し手が、話し手が犯人だという聞き手の思い込みを訂正しようと試み、(32)では、話し手の留学を快く思わない聞き手にむかって自分の考えが変わらないことを宣言し、それによって聞き手の認識を変えようとしている。(33)では、聞き手は一塁に走るべきだと考える話し手が、そうした認識を思っているとは到底思えない聞き手になんとか一塁にむかって走らせようとして試みている。

(30)のAの「告白」や(33)の「命令」のような場合、思い込みは弱い思い込みであるため、話し手としても伝えようという気持ちが強く、聞き手の認識も訂正される可能性が高いが、(31)の「主張」や(32)の「決意」のような強い思い込みの場合、発話時に認識が変わるのは、話し手の頭のなかの聞き手だけであって、実際に聞き手の認識が変わる可能性は低い。しかし、話し手は、話し手の発話によって聞き手の既存の認識が変わりうることを示すことで、実際の聞き手の認識を変えようとして試みているのである。

共有機能は、充填機能や訂正機能とは異なり、単独で働くことはない。必ず、充填機能、訂正機能とともに働く。充填機能も訂正機能も持たないとすると、既存の認識を問題にしないことになってしまうからである。たとえば、(34)のような例である。

(34) (唐突に) ?おれ、トイレに行くんだ<sup>26</sup>。

この場合、「のだ」をつけると、不自然な感じがする。トイレに行くのなら「トイレに行く」とだけ言うほうが自然である。

石黒(2000)においては、この用法は重要な情報のときにかぎり成立すると説明されている。確かに(30)の「結婚する」ほうが(34)の「トイレに行く」よりも重要な情報であることは間違いない。しかし、以下のように「トイレに行く」ことに「のだ」がつくこともありうるのである。

(35) A : (トイレに行こうとしているAに話しかけたBにたいして) ごめん。おれ、トイレに行くんだ。

B : ごめん。気がつかなかった。戻ってきたら、また話すね。

ここでは、Aがトイレに行きたいということにBが気づかなかったという事実が重要である。そのことは(34)と(35)を図式化してみると明白になる。(34)の図式では、「のだ」をつけた文が成立しないことに留意されたい。

<sup>26</sup> 「そういえば」のように既存の認識が存在することを示すものがあれば自然になる。その場合、文末を「んだ」とすれば、想起を表すことが明確になり、さらに自然になる。



(34)の既有的認識

	話し手	聞き手
認識		

入力：話し手

(34)の発話時の認識

	話し手	聞き手
認識		

(35)の既有的認識

	話し手	聞き手
認識		

入力：話し手

(35)の発話時の認識

	話し手	聞き手
認識		

(34)の聞き手の認識が「 」であるのにたいし、(35)の聞き手の認識が「 」である点が重要である。つまり(34)では、聞き手は話し手がトイレに行くかどうか考えていなかったのにたいして、(35)では、聞き手は話し手がトイレに行くということに気がつかなかった点で違いがあるのである。(34)では、聞き手は話し手がトイレに行くとは思っていなかったであろうが、トイレに行かないとも思っていなかったであろう。つまり、聞き手は話し手の行動にかんして先入観がまったくない。その意味で「トイレに行く」ことにかんする聞き手の既有的認識はまったくのブランクである。それにたいして、(35)では、聞き手は話し手が「ぶらぶらしており、話しかけられる状態にある」という思い込みがあり、そうした思い込みがあったからこそ、トイレに行こうとしているAに声をかけたのである。その意味で、(35)の聞き手には既有的認識が存在していたと見ることができる。

ある文に「のだ」がつけられるかどうかは、不十分な既有的認識が存在するかどうかにかかっている。不十分な既有的認識が存在し、その既有的認識にすき間があれば充填機能が働いて「のだ」の使用が可能になり、既有的認識が誤っていれば訂正機能が働いてやはり「のだ」の使用が可能になる。ただ、既有的認識がない、または問題にされない状況で「のだ」をつけると、認識の二重性が失われているため、不自然な表現になる。5の(24)のような2行1列の表に「 」があっても「のだ」がつけられるが、本章の(34)のような1行2列の表に「 」があるものに「のだ」がつけられないのはそうした理由による。

### 7.3 共有機能と充填機能と訂正機能がともに働く場合

(36)A：どうして泣いているの。転んじやったの。

B：ポチが死んじやったんだ。

(36)では、Bが泣いているという状況が、前提としてAとBに共有されている。しかし、Aには、Bが泣いているのは転んだからだという思い込みがある。そこで、Bは「ポチが死んじやった」という自分が泣いている本当の理由に「のだ」をつけて示すことで、聞き手の認識の訂正を試みている。その構図は以下ようになる。

既存の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		

発話時の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		

入力：話し手

「しかし」「でも」などで始まる逆接の文に「のだ」がつくものも、同じ構図で説明ができる。以下の(37)で言えば、事実である「今日は朝からひどい雨だった」は前提として話し手、聞き手に共有されており、その前提から誘発される「試合が中止になる」という推論のみが思い込みとして訂正されることになる。

(37)「今日は朝からひどい雨だったでしょう。でも、試合は予定通り行われたんです。」

## 8 「のだ」の前提機能

### 8.1 「のだから」タイプの前提機能

派生的な機能の第四は「のだ」の前提機能である。前提機能は、「のだから」「のだが」のような接続助詞のある状況下で働くことが多く、また、文末で働くときも他の派生的機能と重なって見えることが多いためか、これまであまり注目されてこなかった。しかし、この前提機能は、これまで見てきた2行2列の分類に当てはまらないものであり、その意味で他の機能と同列に論ずることができず、一つの機能として立てておく必要がある。

前提機能とは、「のだ」のついた文を起点として、そこから後続文に何らかの展開をしていくことを予告する機能である(野田1995)。

(38) (キャンパスで偶然見かけた友達に声をかけて)「おれ、財布落としちゃったんだ。悪いけど、お金貸してくれる？」

既存の認識

	話し手	聞き手
認識		
展開		

発話時の認識

	話し手	聞き手
認識		
展開		?

入力：話し手

これまでの充填機能、共有機能と明らかに違う点は、「のだ」のつく文に完結感が薄いという点である。完結感は、既存の不十分な認識が発話時に充分になったことで得られるものである。しかし、認識が充分になってしまったら、後続文に展開していく力が弱くなってしまい、前提機能は働かなくなってしまう。したがって、前提機能が働く場合、認識は充分になっていないことになる。ところが、そう考えてしまうと、「既存の不十分な認識が発話時に充分になったことを示す」という中核的機能の定義が誤りということになる。その矛盾はどう解決したらよいであろうか。

結論から述べると、この矛盾は、こうした「のだ」の用法を接続助詞相当語「以上」の論

理から類比的に考えることによって、解決することができる<sup>27</sup>。

(39) 給料をもらって働いている以上、責任は果たさなければならない。

接続助詞「ば」などで表される条件表現では前件、後件とも仮定の事態であり、接続助詞「から」などで表される理由表現では前件、後件とも既定の事態であることが通常である。しかし、「以上」の場合、前件は既定の事態である一方、後件は話し手の判断などの仮定の事態である。「以上」の場合だけ、既定と仮定というずれが生じる理由は、「以上」に内在する論理による。その論理とは、大雑把に言うと、「 $P$ 以上 $Q$ 」という文があった場合、「 $P \rightarrow Q$ 」という必然性の強い条件が存在し、そのもとで $P$ が現実に充足されている。したがって、必然的に $Q$ になる」というものである。(39)で言えば、「給料をもらって働いている」ならば、責任は果たすものだ」という条件の必然性のもとで、「給料をもらって働いている」という事態が現実に充足されている。したがって、「責任を果たさなければならない」のは必然であるということになる。

(38)に働く論理もこれと同じようなものである。「財布を落とせば、すなわちお金がなければ、お金が必要になる」という条件の必然性が話し手の頭のなかにあり、そのもとで、「財布を落とす」という事態が現実に充足されている。したがって、「お金が必要になる」のは必然であり、「悪いけど、お金貸してくれる？」となるわけである。

つまり、この「のだ」は、必然性の強い「 $P \rightarrow Q$ 」という条件で、 $P$ 段階を充足したということを示すのである。必然性の強い条件である以上、 $P$ 段階を充足すれば、なかば自動的に次の $Q$ 段階に展開することが予想される。

こうして見ると「のだ」には、一連のプロセスの区切りのよい段階まで充足することを示す機能があると考えることができる。ただし、「のだ」の機能を「不十分な認識を十分なものにする」と考えると、一連のプロセスの最終段階まで常に満たさなければならなくなるので、中核的機能の定義を「不十分な認識を充足する」とゆるめてやる必要が生じる。

「のだ」の中核的機能：「のだ」の中核的機能は、話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示すことにある。

また、ここでは「のだ」の共有機能も働いている。当該の事態が区切りのよい段階まで充足されたという認識を、話し手、聞き手双方が「のだ」の働きをとおして共有することで、そこを起点に後続文が展開していくという文脈の流れも容易に理解できるようになる。

もちろん、聞き手にとっては、(38)のように「財布落としちゃったんだ。」を示されるだけでは、後続文がどう発展していくか、わからない。「一緒に探してくれる？」や「いらない財布持ってない？」などと言われるかもしれないからである。ただ、聞き手は、財布を落としたことに続く必然的な展開を予測することにはなるだろう。このように、前提機能の「の

<sup>27</sup> 田野村(1990:103)に「 $P$ のだから $Q$ 」は「 $P$ である以上、当然、 $Q$ 」「 $P$ であるからには、当然、 $Q$ 」といった意味を表すと言ってよい」という指摘がある。

だ」は発話において重要なテキスト的機能を果たすことになる。

「のだ」のテキスト的機能に関連して、少し述べておきたい。すでに述べたように、完結感が感じられるものについては前提機能を持たず、完結感が感じられないものにかぎって前提機能が働くと述べたが、実際には見方によっては完結感が感じられ、見方によっては前提機能が働くというような例が、まれにはあるが、観察される。

(40)私は子どものころからパンダが大好きで、一度本物のパンダを見たいと思っていました。その夢がやっとかなって、今年の夏上京した折りに、夫と一緒にパンダのいる上野動物園に行ったのです。そして、ガラス張りのなかでのんびりと笹を食べるあこがれのパンダと初めて対面することができました。

既存の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		
展開		

入力：推論

発話時の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間		
展開		?

(40)は、「パンダが見たいという夢がかなって」「上野動物園に行った」という意味では「のだ」の文に完結感が感じられるが、「上野動物園に行って」「あこがれのパンダに初めて会った」という意味ではむしろ「のだ」の文は展開の起点となっている。「のだ」がこのような機能を果たせるのは、「のだ」に充填機能と前提機能があることによる<sup>28</sup>。

すでに見たように、前提機能が「以上」の類比で考えられる以上、接続助詞「から」に「のだ」がついた「のだから」も同じように考えられることは言うまでもない。既定の事実にかんして聞き手との認識の共有を確認し、それによって後続文への展開の必然性を予告するこの前提機能を「のだから」タイプと呼んでおく。

なお、接続助詞「なら」に「の」がついた「のなら」も、「のだから」に準じて考えることができるが、前件が仮定的な事態である点で異なる。すなわち、仮に前件Pを充たした場合、必然的に後件Qになるということを示す。

それから、もうひとつ大きく異なる点は、「のだから」の場合、「のだ」と前件を名詞化したうえで「から」を後接させたと考えられるのに対し、「のなら」の場合、「の」が入らなくても「ば」を「なら」にすることができるので、「の」は単なる名詞化以上の役割を担っていると考えられるという点である。

「なら」は「ば」にくらべて後件に話し手の当為の判断が来やすいという、よく指摘される事実から考えて、「の」の有無にかかわらず、前提機能は、「ば」を「なら」にした時点ですでに働いていると考えられる。では、「の」が「なら」のまえに挿入されることによ

<sup>28</sup> このような「のだ」については、奥田(1990)に言及があり、「場面きりかえ的な機能」と呼ばれている。

って意味はどう変わるのであろうか。結論を述べると、「なら」の前に「の」が入る論理は、すでに(18)や(20)で見た肯否疑問文において確信や疑いの度合いが高まる論理とほぼ同じであると考えられる。

(41) (外出着に着替えている息子に父が)「出かけるのなら、タバコ買ってきて。」

(42) («行ってきます」と行って出かけようとする息子に父が)「出かけるのなら、宿題終わらせてからにしてください。」

(41)では、外出着に着替えていることから、息子は出かけるはずだと父が推論したということが「の」の挿入によって示され、息子が出かけることにたいする父の確信の度合いが高くなるのにたいし<sup>29</sup>、(42)では、「息子は宿題を終わらせていない以上、何よりも先に宿題を終わらせるはずだ」という父の既存の思い込みが、息子の「行ってきます」という発話によって崩され、そこに「の」が挿入されることで訂正機能が働き、「本当に出かけるのか」という意味での疑い、拒絶のニュアンスが感じられるようになる。

## 8.2 「のだが」タイプの前提機能

一方、前提機能には「のだが」<sup>30</sup>タイプとでもいえる、もう一つのタイプが存在する。

(43)元日に初日の出を見に江ノ島に行ったんだけど、ものすごい数の人がいて、びっくりしちゃった。

このような「のだが」は前置きと呼ばれ、後続文の話をつけるために必要な情報ではあるが、「のだから」とは異なり、前件と後件が特に論理的な関係にあるわけではない。「のだ」が挿入される場合、聞き手が前件の情報を知らないことが条件であり、次の話をつけるために当該の情報を共有するという共有機能を果たしている。

既存の認識

	話し手	聞き手
認識		
展開		

発話時の認識

入力：話し手		話し手	聞き手
	認識		
	展開		?

<sup>29</sup> 田野村(1990:97)では「のなら」は「相手の様子を受けて発言する場合に特に用いられやすい」のにたいし、「なら」は「むしろ、文脈や状況に基づく見込みのない、いわば白紙の状態での仮定を表現するときに用いられやすい」と指摘されている。

<sup>30</sup> 「のだが」と「のだけど」は書きことばと話しことばの文体差と考え、同等なものとして扱う。なお、ここで扱う「のだが」は前置きの「のだが」に限る。逆接の「のだが」は、野田(1997:170)の「従属節の事態と主節の事態との矛盾・対立、話し手の意外性や不満が強く表されること、その性質は「のに」と類似性があること」という指摘の通りである。逆接の「のだが」がこのような意味を帯びる理由は、順接の「のだから」に準じて考えるとよく理解できる。「PならばQ」という必然性のある条件があり、そのもとでPは既定の事態であることを確認した。したがって、Qになるのは当然なのに、実際はそうはなっていない。だから意外だ、不満だ」ということであろう。つまり、逆接の「のだが」は前節の「のだから」タイプの前提機能を帯びていると考えられる。

(44)元日に初日の出を見に江ノ島に行ったんだ。ものすごい数の人がいて、びっくりしちゃった。

(44)のように接続助詞がなくても同じことであるが、(44)にかんして、論者自身はあまり不自然には感じないが、比較的年配の世代を中心に容認が困難と考える人が多いようである。事実、書きことばでは、(43)のようなタイプは「のだが」の形で頻繁に現れるのに対し、(44)のようなタイプはほとんど現れない。従属節の場合とは異なり、文にすると共有機能が前面に出るので、若者の雑談のような、プライベートな情報を仲間うちで共有し、連帯感を高めるのにはよい反面、話し手側から自分の話題を持ちかけるのに、自分は知っていて相手は知らないということを強調する「のだ」をつけると、押しつけがましく感じられるというマイナス面もあり、公の場では避けられるのであろうと思われる。

このように、話し手が聞き手と新たな話題を共有することによって、そこを起点に新しい話題を始めようとする「のだ」の機能を、「のだが」タイプの前提機能として、より論理的な「のだから」タイプと区別しておく。ただし、そうした区別の一方で、「のだから」と「のだが」に代表されるように、接続助詞のまえに挿入される「の」が一般に前提機能を表すという共通面が存在するということもあわせてここで強調しておきたい。

### 8.3 「のではない」と前提機能

本節では、これまで触れなかった否定の意味を表す「ない」を含む「のだ」、すなわち「のではない」について、前提機能との関連で述べておきたい。

否定の「のではない」では、つねに訂正機能が働いている。肯定なしに否定がありえない以上、否定と対になる肯定が必ず既存の認識として存在しているからである。訂正機能が働くことによって、充分であったはずの認識が否定されてしまう。それによって、充分だった認識に空隙が生じてしまい、後続の展開でその空隙を埋めようとする意識が働くのである。それが、「のではない」によって喚起される前提機能である。

(45)寝坊して遅刻したんじゃない。人身事故で電車が遅れて遅刻したんだ。

既存の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間	× <sup>31</sup>	
展開		

入力：話し手

発話時の認識

	話し手	聞き手
前提		
すき間	×	×
展開		?

(45)では、「遅刻した」という事実そのものは、話し手と聞き手とのあいだで前提認識と

<sup>31</sup> 「×」は、認識の否定を表す。

してすでに共有されている。しかし、聞き手が「寝坊して」という誤った認識を持っているため、話し手は「寝坊して遅刻したんじゃない」という発話でそれを否定する。そのことによって、充填機能と訂正機能の両方が働く。しかし、否定文というものの性格上、充填機能は不十分にしか働かない。そこで、さらにそれと対になる肯定文による認識の充足が必要となり、それが前提機能として働くのである。

否定表現は基本的にそれ自体では存在意義をもたず、肯定表現に依存して初めてその存在意義をもつ。その意味で、否定の「のではない」の場合、その否定された認識が変わるすき間認識が後続文脈で提示されることが多い。例外は、すでに先行文脈ですき間認識が提示されている場合、「わざとやったんじゃない」のように対になる肯定表現が後続文脈がなくとも推論できる場合、常識の否定や禁止など、否定表現それ自体で表現としての存在意義を有する場合に限られる。否定の「のではない」では、十分な認識を不十分なものにしようとする「のだ」とは逆の原理が働いており、その不十分になった認識を再度十分なものにしようとする復元力が「のではない」に前提機能を与えている。

## 9 まとめ

「のだ」は以下のような中核的機能を示すマーカーである。その中核的機能に由来する四つの派生的機能のいずれか、または複数の機能が働くことで、多様な用法が生まれる。

### 「のだ」の中核的機能

「のだ」の中核的機能は、話し手、聞き手いずれか一方の、既存の不十分な認識が発話時に充足されることを示すことにある。

### 「のだ」の派生的機能

「のだ」の充填機能：話し手または聞き手の既存の認識にあるすき間を埋めることを示す機能。

「のだ」の訂正機能：話し手または聞き手の既存の認識にある思い込みを修正することを示す機能。

「のだ」の共有機能：話し手または聞き手の一方にある認識を双方に共有させることを示す機能。

「のだ」の前提機能：「のだ」をともなう文が後続文の展開の起点になることを示す機能。

## 参考文献

庵功雄(2000)「教育文法に関する覚え書き 「スコープの「のだ」」を例として」『一橋大学留学生センター紀要』3

石黒圭(2000)「「のだ」に関する一試論」『一橋大学留学生センター紀要』3

今村和宏(1996)「論述文における「のだ」文のさじ加減 上級日本語学習者に文の調子を伝え

- る試み」『言語文化』33 一橋大学語学研究室
- 奥田靖雄(1990)「説明(その1) のだ、のである、のです」『ことばの科学4』むぎ書房
- 菊地康人(2000)「「のだ(んです)」の本質」『東京大学留学生センター紀要』10
- 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店  
(1983)『新日本文法研究』大修館書店
- 小金丸(現 野田)春美(1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』9-3 明治書院
- 佐治圭三(1972)「「ことだ」と「のだ」 形式名詞と準体助詞 (その二)」『日本語・日本文化』3 大阪外国語大学留学生別科
- 田中望(1980)「日常言語における“説明”について」『日本語と日本語教育』8 慶應義塾大学国際センター
- 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 野田春美(1993)「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって」『日本語学』12-11 明治書院  
(1995)「「のだから」の特異性」仁田義雄(編)『複文の研究(上)』くろしお出版  
(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 林大(1964)「ダとナノダ」『講座現代語6』282-289 明治書院
- マクグローイン・H・直美(1984)「文章・談話における「のです」の機能」『言語』13-1 大修館書店
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 松岡弘(1987)「「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』24 一橋大学語学研究室
- 松岡弘(1993)「再説 「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』30 一橋大学語学研究室
- 三上章(1953a)『現代語法序説 シンタクスの試み』刀江書院(復刊 くろしお出版 1972)  
(1953b)「ハとガの使分け」『語文』8:20-27 大阪大学文学部国文学研究室
- 山口佳也(1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56:12-24 早稲田大学国文学会
- 吉田茂晃(1988)「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15:46-55 神戸大学文学部国語国文学会
- Alfonso, Anthony(1966) *Japanese language patterns: A structural approach. vol.1* Tokyo: Sophia University L.L. Center of Applied Linguistics